巻頭エッセイ

英語を学ぶ視点

高梨庸雄　Takanashi Tsuneo

2006（平成 18）年度版 *NEW CROWN ENGLISH SERIES* は現行教育課程の方針をどのように具体化しているか。今回は「英語を学ぶ視点」から述べることにする。現行教育課程では「自ら学び，自ら考える力」がキーワードのひとつになっている。これは平成 8 年に出された中央教育審議会第一次答申の中にある「生きる力」を育成するための方針のひとつである。それを英語科の教材において実現するには，次のような 3 つの視点が必要であろう。

1.「語学」ということばに対する従来からのイメージには“丸暗記”，“文法”，“訳読”などがあって，新しい指導理念で始められた教育が期待された成果を上げることができないと，我が物顔に息を吹き返すのが通例であった。しかし，それらのイメージに共通するのは，「自ら考える」ことを放棄して英語圏の人の発話行動を一方的に受け入れる受動的学習スタイルである。特に最近の子どもたちは“指示待ち族”と揶揄されるほど，自ら考え，自ら判断することを避けようとする傾向がある。しかし，語学学習で大事な視点は personalize（自分で考え，自分で判断し，自分で使いながら得たものを自分の経験とするということ）である。これを実現するためには，ことばについて考える題材が必要である。

2. 好むと好まざるとにかかわらず，英語は現在，自国語で意思の相互伝達ができない場合のコミュニケーションの手段として，最も利用されている言語である。そのようなコミュニケーションでは，話し手が意識しなくても，国，地方，階級，民族などのいろいろな言語習慣が入ってくる場合がある。例えば，それぞれの文化圏に特有の思考パターンや行動様式などである。中学生がやがて社会人となり外国の人々と交流する機会に出会ったとき，文化や歴史の違いを越えてお互いに理解しようとする心が大切であり，異文化への寛容が求められる。そのような国際的感覚を養うためには，生徒の世界観を広げるのに役立つ題材が必要である。

3. 国際理解，異文化交流は本来，双方向コミュニケーションであるから，基本的に give & take の精神が必要である。海外から得ようとするばかりで自分の国から発信しないのは，受信機はあるが放送局を持たないようなものである。中学校レベルで明日からでも発信するためには，まず自分の郷土や国の文化に対する理解と誇りを持つことである。そして，自分の英語でそれを発信する勇気を持つことである。そのための基本的なこととして，英語の授業で学ぶことを時には日本語と比較したり，ALT のジェスチャーに注意したりしながら，文章やスピーチで効果的に自分の考えを述べるにはどうすればよいかを考えることである。外国語を学ぶことは，生徒に自分の国を客観的に見る機会をもつことになり，自国の文化のユニークさに気づく機会ともなる。

NEW CROWN では，これらの視点を大切にして教科書づくりを行ってきたのである。

たかなし　つねお
京都ノートルダム女子大学大学院教授。専門は英語教育学。目下の関心事は「評価」（特に，生徒の英語力，並びに教師の英語力・指導力）。著書は『英語の「授業力」を高めるために』（三省堂），『英語リーディング事典』，『英語コミュニケーションの指導』（研究社）他多数。